

『林下集』『実家集』と諸家集

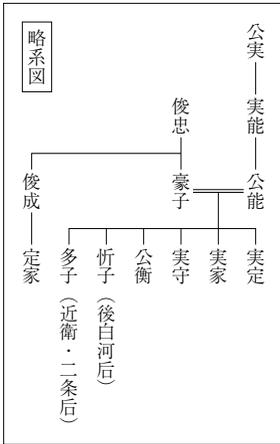
——平安末期の私家集編纂意識一斑——

小林賢太

一 はじめに

藤原実定と実家は、大炊御門右大臣公能を父、藤原俊忠女の蒙子を母とする兄弟である。同母の兄弟姉妹には他に実守、公衡、忻子、多子らがいる。^①実定、実家ともに勅撰集入集歌人であり、藤原俊成は叔父、定家は従兄弟にあたる。それぞれ家集が残っており、実定の『林下集』は治承三年（一一七九）頃までの詠三七九首を収め、自

撰と考えられる。^②一方、『実家集』は四一九首を収め、寿永二年（一一八三）四月から文治元年（一一八五）三月までの間



に、『千載集』の撰集に供するため自撰されたと考えられている。^③閑院流に生まれ、御子左家と繋がりをもち、ともに家集を残すこの兄弟は、実定が『百人一首』作者ということもあって、和歌史上の存在は決して小さくなく、研究も積み重ねられている。^④しかし、これらの家集については、さらに考究すべき余地が残されているよう。本稿では、主に『林下集』を軸に、『実家集』やその他の家集にも収載される同じ贈答歌に着目する。これらの中には、家集によって表現や順序に相違が認められるものがある。もとより誤写の可能性もあり、慎重に取り扱う必要があるが、同一贈答歌の差異から、それぞれの家集の編集態度を炙り出すことが可能であろう。それらを糸口として、平安末期における私家集編纂の一斑を捉えることを目論みたい。

二 『林下集』と諸家集

松野陽一^⑤と黒田彰子は、『実定集』と『師光集』とに収められる次の贈答を取り上げている。

なにはよりかへりて侍しに、左大臣実定のもとより

みやこだに秋のあはれはあるものをひなのながちのものがたりせよ

返し

おもひやれひなのながちのさびしさはいとふみやこへかへるこゝろに
(師光集・六六〇六七)

をの、宮のじょうもろみつ、九月ばか〇に、しほゆあみ
になにはのかたへまかりて、かへりたりとき、て、申つ
かはし、

みやこだに秋のあはれはあるものをひなのながちのものがたりせよ

返ごと

おもひやれひなのすまひのさびしさはなにはの事をかたるべき
きみと
(林下集・二一〇〇一三二)

傍線部の異同について松野は、「単なる伝写上の異文というより、師光自身の改稿の可能性が強い。常識的には相手の実定の手に残った方が初案、師光集の方は撰集に際しての、歌群構成を意識しての改作とみるべきであろう」と述べ、黒田は「師光集に見える贈答歌のうち、他出資料の残存するものと比較すると、130歌の改編はあまりにも顕著である」、「印象としては、『ひなのながち』という語が両首にみえること、実定集（引用者注：本稿では『林下集』と称す）の場合、『なにはのこと』が『難波』『何は』をかけて詞書と対応していることから、師光集のものの方が本来の

たちであり、むしろ実定集の方がより整ったかたちを求めた改変を経てるように思われるが如何であろうか」と述べる。贈答歌において相手の歌の語句をそのまま取り込み返歌することは一般的で、「ひなのながち」が鸚鵡返しにされる『師光集』の本文の方が、詠時の形に近いと思われる。稿者は黒田説に同意するが、留意したいのは、『師光集』では両首に繰り返される「ひなのながち」が、『林下集』では師光歌が「ひなのすまひ」と異なる表現となっている点、また同じく『師光集』では両首に繰り返される「みやこ」という語彙が、『林下集』の師光歌には使われていないという点である。

さらに、『林下集』収載贈答歌と、その他出資料を比較する。

としごろの妻におくれたる人のもとへつかはしける

いもせ川かへらぬ水のわかれ路はき、わたるにも袖ぞぬれける
かへし

き、わたる袖だにぬる、いもせ川水の心をくみてしらなむ
(清輔集・三四一―三四二)

亡室のおもひにはべりしころ、清輔朝臣の申おくりたりし

いもせがはかへらぬみづのわかれちはき、わたるにもそでぞぬれける
返事

き、わたるそでだにぬる、なかはの水の心をくみてしらなむ

む

(林下集・二六二―二六三)

右の清輔との贈答は、傍線部の異同があり、『清輔集』では両歌に「いもせ川」が繰り返されているのに対し、『林下集』の実定詠はそこが「なかゞはの」となっている。先の『師光集』の贈答と同じ現象である。この贈答は『続千載集』に収められている。

後徳大寺左大臣室まかりにける比申しおくりける

清輔朝臣

いもせ河かへらぬ水の別ぢはさきわたるにも袖ぞぬれける

返し

後徳大寺左大臣

さきわたる袖だにぬるる中河の水の心を汲みてしらなむ

(巻第十九・哀傷歌・二二七―二七三)

実定詠は『林下集』の形で採られており、同集から採歌されたと
思しい。次に、寂蓮との贈答がある。

世を遁ぬと聞て、左大将実定の許より

世の中を出ぬとなどか告ざりしおくれじと思ふ心ある物を

返し

人をさへ導く程の身なりせば世を出ぬとは告もしてまし

(寂蓮集Ⅰ・六六―六七)

おなじころ (六、七字分並) むおくれしに一ま (以下次)

返事

人をさへみちびくほどの身なりせばよをいでぬとはいひもし

てまし

(林下集・二八八)

『林下集』に欠脱があるが、『寂蓮集』の寂蓮歌は結句「告もし

てまし」で、実定歌の「告」と対応するが、『林下集』は「いひ」となっている。なおこの贈答も、『続千載集』に収められる。

寂蓮法師世をのがれぬときき侍りて申しつかはしける

後徳大寺左大臣

世の中をいでぬとなどかつけざりしおくれじとおもふ心ある

ものを

返し

寂蓮法師

人をさへ道びくほどの身なりせば世をいでぬとはつけもして

まし

(雑歌下・二〇〇五―二〇〇六)

寂蓮詠は『寂蓮集』の形で採られている。次に源頼政との贈答がある。

祝言の次にもむかし思ひ出られてこそとて、かれより遣

しける

木がくれてみし夜のかはらずはおなじ雲井を哀とやおも

ふ

かへし

木がくれてその夜の月になれにしに雲井をみては哀とぞおも

ふ (頼政集Ⅰ・五九九―六〇〇)

おなじきころ、よりまさの朝臣のもとへ申やりし

こがくれてみしよの月をわすれずはおなじくもみをあはれと

やおもふ

返し

こがくれてその夜の月になれぬるはくもぢをみてもあはれと

ぞおもふ

(林下集・三二一―三三三)

この贈答では、頼政歌と実定歌の双方に異同が認められるが、第四句「雲井」「くもち」に注する。『頼政集』では実定と頼政の双方の第四句が「くもち」で対応するが、『林下集』では頼政歌の第四句が「くもち」となっている。

以上の四例は、転写の誤りが介在した可能性も完全には否定しきれないものの、他の家集で繰り返し返しとなっている語句が、『林下集』では異なる表現となっている点が共通する。前述の通り、贈答歌において核となる語句が鸚鵡返しされるのは自然なことであり、この事象は、贈答当時の「原表現」を伝えるのが、『林下集』ではない方の家集である可能性を示唆するだろう。逆に捉えるなら、例に挙げた『林下集』の贈答歌は改作されたことになる。もしそうであるなら、師光、寂蓮、頼政との贈答では、実定は相手の歌をも加工したことになる。家集編纂時に自分の歌に手を加えるという行為はそれほど珍しくないと考えられるが、実定は相手の歌をも改作した可能性が高いのである。清輔との贈答歌では自詠の方を改作しているにもかかわらず、なぜ師光、寂蓮、頼政との贈答歌では相手の歌を改作したのであるか。この四つの贈答歌はいずれも答歌の方が改作されており、あるいは贈答はそのままで答歌の方に手を加えるという方法が、『林下集』において贈答歌を加工する際の方針であったのかもしれない。

三 『林下集』と『実家集』

次に『林下集』と『実家集』に収められる兄弟間の贈答歌を比

較する。

月いみじくあかきよ、内大臣の大納言にておはせしころ
おもひやるこゝろはきみが、げながらひとりながむるよはの
月かげ

かへりごと

いまぞしるこゝろはきみにかよひけりひとつくも井の月をな
がめて

(実家集・一五六―一五七)

月のあか、りし夜、とうの中將さねいへのもとへ申つか
はし、

おもひやるこゝろはきみが、げながらひとりながむるよはの

月かな

かへし

いまぞきく心はきみにかよひけりおなじくもゐのつきをなが
めて

(林下集・三〇四―三〇五)

前節で確認した傾向に照らせば、傍線部と点線部のように、『実家集』で贈答歌に対応している「ひとり／ひとつ」が、『林下集』答歌では「おなじ」となっており、さらに実定詠も『実家集』で二度繰り返し返される「かげ」が、『林下集』本文では結句が「かな」となっている。

実家詠の歌意を考えると、「おなじ雲居の月を眺めて」の方が解しやすく、先例を見ても「ひとつ雲居」はほぼないが、「おなじ雲居」は多く詠まれ、「月」との詠み合わせ例も多い。贈答時は相手歌の語句をそのまま取って返歌し、即時詠としては問題

なかつたのであろうが、家集収録に際して実定が実家詠を改作したのではあるまいか。実定詠も贈った時はあえて「かげ」を重ねて興じたのかもしれないが、家集収録にあたり、いわば同心病を避けて改めたのであろう。ところが、このような単純な異同でなく、さらに複雑な異同を呈するのが、次の贈答歌群である。対応関係を整理するため、便宜的に和歌にアルファベットの符号を付す。

内大臣、さきの大納言と申し、とき、うへにおくられたるころ、ほどへてかれよりいひつかはしたりし

(A) ものおもふやどのこずゑのみちこそなみだと、もとまらざりけれ

かへし

(B) もみちばのもろきにたぐふのみならずなみだもともにいりやみゆらん

そのとしのしはすのつごもりの日おもひやりし、あはれにて、さきの大納言の御もとに

(C) うかりけるとしのかたみけふくればまたへだ、らんことやかなしき

(D) おもふらんことしもくれぬかくしおきてむかしがたりにならんあはれを

かへりごと

(E) よのつねのとしのくれだにあるものをいかにかすべきけふのかなしき

(実家集・三九四～三九八)

おなじころ、左宰相中将、嵐のいたくふきしあしたにもみちばのふかきいろにもたぐふ覧なげきのもとにもろきなみだは

返歌

(A) ものおもふやどのこずゑのみちば、なみだと、もとまらざりけり

亡室の鏡を梵字にして月に出て障子にかきて、供養しはべりし導師にて、澄憲僧都朝に申おくりたりし

みしひとのかげもなければますかゝみむなしきことをいまやしりぬる

返歌

むなしとはおもひしれどもますかゝみよそふる月はまたもいでけり

これにぐして申たりし

うきとしもくれぬるはてはあるものをいかにつきせぬあきのこ、ろぞ

僧都返事

ながきよのあけぬかぎりはつらかりし秋の心もつきじとぞおもふ

としのくれに、左宰相中将

(C) うかりけるとしといひてもけふ二字奪也くれ、そのなこりさへたちやへだてむ

返事

(E) よのつねのとしのくれだにあるものをいかにかすべきけふ

『実家集』では、妻を亡くした実定から歌が贈られ、実家が用意を込め返歌しているが、『林下集』では先に実家が歌を贈ったことになっている。また(A)の歌は(A')と同じと見てよからうが、(B)と(B')は同一歌とするのが躊躇われるほど大きな異同が存する。これについて森本元子は、(B)と(B')は「内容の上では同様のことを詠じていて、ただ実家集の方がより強く表現されているといえよう。おそらくは、実家集自撰の折、自作の本文を改め、位置を変えたのであろう。同一贈答歌が当事者二人の家集に収められる場合、こういう例はしばしば見られる」と述べる⁽⁸⁾。一方、黒田彰子は、(B)と(B')を別の歌とみれば、(B') (A = (A')) (B)の順に贈答されたと解せなくもないが、それでは収まりが悪く、(B)と(B')は「いずれかが改作されたのではないかという推測に傾く」とした上で、「相手が家集に入れる際自詠を改変したのか、実定が相手の歌を改変したのかは判断がむづかしいが、かならずしも自詠を変えることが常識とは断定できない面があるのではないかという私見を提出しておきたい」と述べる。

内容を考えると、(B)と(B')は相似の内容を詠じており、両首は元は同じ歌の可能性が高い。これまで確認してきた事例同様、これも実定の手による改作ではないだろうか。語句の重複を観察すれば、『実家集』では四句目「なみだと、もに」「なみだも」ともに「が素直に対応するが、『林下集』ではそうっていない。歌の完成度を吟味しても、『実家集』(B)は、「たぐふのみな

らず」など、口を突いて出たかのような物言いであり、説明的で句切れもなく稚拙な印象を受ける。これが『林下集』(B)では倒置法を用い、ずつと解しやすしい。「歎き」が「木」や「投げ木(薪木)」との掛詞になる例は多く、⁽⁹⁾ここでも「木のもと」と重ねられていたことは明らかである。「もみぢ」から「なげきのもと」の語句が選ばれているのも、『林下集』の方が『実家集』より彫琢された形と評せる。さらに『林下集』では、歌に直接「紅葉のもろさ」は詠まれないが、詞書「嵐のいたくふきしあしたに」において「もみぢのもろさ」が表現され、詞書と和歌の呼応が認められる。実定と実家は、実定室の死をめぐって「遺懷哀傷十首」と称する十首歌贈答を交わすが、その中には(A')、(B')に非常に類似した贈答歌が存する⁽¹⁰⁾。

さてもなほあきのこのはのもろさへなげきのもとにあはれ
そふらん (実家集・四〇一・実家)

おもへたかなしきあきをあまたへてこのはのいろにたぐふ
なみだを (実家集・四一一・実定)

実家詠の「なげきのもと」という語彙は、改作された後と考えられる『林下集』(B)歌に詠まれているし、紅葉の色と涙の色を重ねて弔意を表すという内容も(B')に通じ、(B')はこの両首を踏まえ、兄実定が家集編纂時に弟の作を改めたのではないだろうか。妻の死を嘆く兄のもとへ、弟が弔歌を送るとの経緯は演技的で、意図的構成が感じられる。なお家集編纂時に贈答歌などの記録、資料がどのような形で保存されていたかは不明であり、何らかの混乱が生じた可能性もないわけではない。しかし仮に

『実家集』の形で詠歌記録が残っていた場合、(A)で「私の涙は紅葉が脆く散るのと同じく止まりません」とあるのを受けて、(B)で「あなたの涙が紅葉と同じなのは脆さのみならず、その色までも同じでしょうね」と詠んだと考えるのが自然で、(B)↓(A)といった順序は不自然である。その後の(C)(E)の贈答は実家から実定へ見舞う形であり、弟から弔問される兄という構図を繰り返すべく、(A)(B)は実定が家集編纂時に順を入れ替え、その際に歌の表現を磨くだけでなく、展開の不自然さを解消するために(B)を(B')に改作したと想定される¹¹⁾。

四 加工する『林下集』

『林下集』は生の詠歌資料をそのまま並べた記録ではなく、表現や配列に趣向を凝らして自己を演出し、ストーリーを作り出す傾向が認められている。松野陽一は『林下集』に「沈淪訴歎から還任祝賀でまとめる編纂意図」がある点を指摘した¹²⁾。『林下集』の雑に当たる冒頭部には、「しづむことをなげき侍しころ、九月ついたちになや、法輪にまゐりたりしに、大井に三日の月のうつりて侍しをみて」(二九五番詞書)、「しづみはべりしころ、月をみて」(二九六番詞書)と沈淪を嘆く歌群が置かれ、それに続き贈答を中心とした歌が並んだ果てに、「大将になりはべりたりし時、俊成入道の申おくる二首」(三七四番詞書)から始まる大将任官を祝う俊成、頼政、師光らとの贈答歌が巻軸をなす。淪落を嘆く歌群と大将就任の祝意歌群とを、雑の最初と最後に配する点、確かに沈淪から還任祝賀への物語を演出する実定の企図を認めること

ができるだろう。

先に取り上げた『林下集』二七〇〜二七七番歌にも、同様に意図的な演出が巧まれているのである。同歌群を含む哀傷二六二〜二八三番歌は、亡妻挽歌群とも称すべきものであるが、江藤芙紗子は「抒情的な和歌は自己告白に近く、表現された世界は作者の主体的状況とほぼ次元を等しくするものと思われる」と述べ、家集は実定の実人生世界を反映させたものとする。しかし『林下集』の配列や表現に、様々な加工の痕跡が認められる以上、中村文が「彼自身の不遇な体験から来る嘆息を投影させつつも、そうした心情に文学的な昇華を通過させることによって、長い沈淪に嘆く一人の男の像を、より普遍性を帯びたものとして創作しようとしたのではないだろうか」とするように¹⁴⁾、『林下集』は虚構をも交えた、演出的な側面を持つ作品と考えるのが妥当であろう。亡妻挽歌は万葉時代から詠まれ¹⁵⁾、珍しい主題ではない。しかし、奇しくも俊成、隆信、覚綱ら同時代の歌人たちも亡妻を偲ぶ歌群を家集に収録している。こうした中で実定も亡妻哀傷歌群を編み、その際に歌群内部に一貫した世界観を構築するため、悲しみに沈む中で弟から弔問の歌を贈られる経緯を作り出したのであろう。実家との贈答を分断するかのように途中に配される澄憲との贈答も、実定詠「うきとしもくれぬるはてはあるものをいかにつきせぬあきのこ、ろぞ」で、自身の憂愁を詠むと共に「年が暮れる」ことを示唆し、秋から冬への時間の経緯を言葉の連想で繋ぎ、直後の実家との「としのくれ」をめぐる応酬の伏線となっている。

後半、『実家集』(C)(D)の、実家から実定への二首は、『林

『下集』では(D)が略されており、(C)も下句が大きく異なる。ここでも、『実家集』歌は「かなしき」「かなしさ」が対応するが、『林下集』はそうならない。さらに『林下集』(C)では、「たちやへだてむ」の「たち(立つ)」が「とし」の縁語となっており、推敲された後と思しい。『実家集』のみに見える(D)は、意が解しにくく、二首の贈歌に一首の答歌は不首尾であろう。これらも実定が整理したうえで、答歌(C)も推敲を加えて(C)に改作したと考えられる。

『林下集』二七〇～二七七番歌の原型は、『実家集』に近い形であつたものを、実定が十首歌贈答を参照しながら、語句の重なりを避け、倒置や掛詞、縁語を組み入れながら改作するとともに、詞書との関連や贈歌答歌の数も整えて、妻を亡くした兄を弟が弔う経緯に再構成したものと考えられる。集の成立は『林下集』の方が『実家集』より早く、実家は当然兄の家集を見ていたに違いない。にもかかわらず『実家集』は、おそらくは贈答時そのままに近い形で収めたのである。乱暴に言えば、『林下集』は相当に加工され、『実家集』はあまり加工されなかつたということになる。このような編纂態度の懸隔は、何に起因するのであろうか。ひとつには和歌に対する執心の差もあろう。実家については次節で述べるが、実定に関しては先学が指摘するように、和歌への関心が非常に深く、同時代人からの評価も高かつた。例えば次に挙げる如く、歌林苑における歌会への度重なる参加や、歌林苑の歌人らとの親密な交際は、和歌への傾倒を示している。

白川にて歌仙どうたあはせしはべりしに、落葉をよめ

る

きく人のそでさへぬれぬこのはちるおとはしぐれにまがふのみかは
(林下集・一五五)⁽¹⁸⁾

歌仙どもをまねきて、郭公のうたよみしに

まつ人のこゝろをしらばほとゝぎすやどのこずゑにしはしか
たらへ
(林下集・六八)⁽¹⁹⁾

また、多くの和歌催事に参加するだけでなく、自ら歌会や百首歌を催行する等、積極的な和歌への関わりが見られる。こうした歌歴を持つ実定は、同時代の歌人からも一目置かれていたはずであり、当時の秀歌撰『歌仙落書』にもその名が入っている。また次の賀茂重保との贈答からは、実定の歌人としての自負が窺える。

賀茂神主しげやす、近代歌仙の歌どもをえらびて、堂の障子のしきがたにかき侍とて、或所の女房につたへて、色紙方をか、せ侍しに、そへてやる

わかのうらのなみのかずにはもれにけりかくかひもなきもし
ほぐさかな

返事

重保

わかのうらのなみくならばもしほぐさかきあつむるにかゝもるべき
(林下集・三六六～三六七)

実定は自他共に認める一角の歌人として矜恃を持ち、自らの家集が多くの人に読まれることをも意識していたのであろう。それ故に贈答歌であつても、和歌としての完成度に配慮し、時には他人詠をも改作したと考えられる。一方、実家は家集編纂において異なる意識であつたと思しい。

五 『実家集』の資料性

『実家集』と『林下集』以外の家集を比べてみたい。

いへのはなさかりなるころ、にはにたてぶみのおちたるをみれば、よりまさの朝臣の、こぞのよりむかひわたりにいへるしたるがいひたるなりけり、となりにいとふなどかきたり

さくらさくこずゑをみれどよそなればそなたの風をまつとしらなむ

かへりごと

はなさそふかぜをまちえてうれしくはをしむとなりのなげきとをしれ

かくてとしあまたかさなりてのち、はなのころ、かれよ

いのちあれば又もみてけりこぞだにもこれやかぎりとおもひしはなを

かへりごと

はなをみてこれやかぎりとおもふものこりのはるのかずはつきせじ

(実家集・四三―四六)

隣なる所に桜のさきたりけるが、梢ばかりみえければ、
あるじのもとへ

桜さく梢をみれどよそなればそなたのかぜをまつとしらなむ
かへし

花さそふ風を待えてうれしくはやがて隣のなげきとしはれ

(頼政集Ⅰ・四八―四九)

右は邸が向かい同士であった実家と頼政との桜をめぐる贈答である。『実家集』は年次が隔たついても関わりのある歌はまとめて掲出する傾向が認められる点、『林下集』に共通する。『頼政集』では「にはにたてぶみのおちたる」や「となりにいとふ」といった周辺情報は略されているが、「となりにいとふ」は「さくらちるとなりにいとふはるかぜは花なきやどぞうれしかりける」(後拾遺集・第一・春下・一三八・坂上定成)を踏まえる。『頼政集』では詳細は省かれ、歌に重点が置かれている。一方『実家集』は、付帯する情報も重視されており、和歌そのものほもとより、詠歌状況を記録しようとの志向が強い⁽²⁾。そして『林下集』に認められたような大きな推敲や、事の経緯の加工は見当たらない。

月くまなきよ、おなじうたを、ふたりがもとへ

我みてのたぐひおほえぬ月のよはふりぬる人ぞまつとはれける

かへりごと

兵衛殿

としへぬるあはれをそふる月なればたぐひなしとはいかゞみざらむ

かへりごと

よりまさの朝臣

な、そちの秋にあひぬるみなれどもこよひばかりの月はみざりき

(実家集・一三三―一三五)

八月十七夜の月、つねよりもくまなくみえ待しに、むか

ひの中將の許こころに

我みてもたぐひおぼえぬ月の夜はふりぬる人ぞ先とはれぬる
返し

七十年の秋にあひぬる身なれども今夜ばかりの月はみざりし

(頼政集一・二二一―二二二)

右もまた頼政との贈答だが、両集に大きな相違はない。次に『実
国集』との違いを見る。

こ建春門院〇女房をさそひて、大井にもみぢ見に、ことう
大納言、左衛門のかみときこえしとき、ゆくとてさそは
れしに、さはることありてまからざりしかば、かの大井
より 大納言さねくにの御

もろともにきみと見ぬまのみぢばや心のやみのにしきなる
らん

かへりごと

さそはれぬみこそつられれもみぢばのなにかはやみのにしき
なるべき (実家集・一七一―一七二)

(建春門院)
皇后宮の女房もろともに大井川のみぢ見にまかり侍し

に、三位中將にはかにさはる事ありてとまりたりしか
ば、いひつかはし侍し

もろともにきみとみぬまのみぢば、こゝろのやみのにしき
なりけり (実国集 二二六)

実国から大井川への紅葉狩りに誘われたものの、差し障りがあ
り不参であった折のやりとりである。実国の歌に若干の異同があ

るが、大きな異同とはいえない。

僅かな例だが、『実家集』収載贈答歌を、他家集の同じそれと
比較した。異同は著しいものではない。実家は家集に収録する際、
原歌をさほど改作していないようである。『林下集』との大きな
異同は、やはり実定の手による改作と考えられる。黒田は「林下
集の贈答歌はかならずしも初案の忠実な再現でない可能性が高
い」、「林下集贈答歌群と実際の贈答との間には、一定の虚構があ
ると見るべき」とするが、やはり『林下集』を読む際には、相応
の加工が施されていることを念頭に置く必要がある。『林下集』
の多くの贈答歌には、高い資料性が認められてきたが、それは現
実そのままではない可能性を、常に考慮に入れておく必要がある。

これに対して『実家集』は、原歌にさほど手を加えてはいない
らしい。となると、『実家集』の記述は贈答当時の原態に極めて
近い可能性が高く、現実のかなり正確な反映と評価して良から
う。従つて、実家自身にそのような意図はなかつたかもしれない
が、『実家集』には高い資料的価値を認めることができる。こう
した意味で、『実家集』の文学史的意義をいまま少し大きく宣揚し
て良いかもしれない。なぜ実家は加工を施さなかつたのであろう
か。中村が指摘するように、実家が歌合や歌会での作を記録する
より、和歌を介した風雅を記録することに重きを置いていたこと
も関係していよう。実家は管弦の才にも長け、書籍の収集に熱心
で、和歌のみに執する人ではなかつたと思われる。一方、兄の実
家は先述した通り、和歌への傾倒著しい。

また家集が編纂された目的においても両者は異なる。『実家集』

は『千載集』撰集資料として編纂されたと目されているが、そうであるならば実家には、自身の家集が多くの人に読まれる、もしくは読ませようという意識が、比較的希薄であった可能性がある。それよりも撰集資料としての有用性を重んじ、和歌を多く収載することに重きを置いたと考えられる。その為、読者を意識して自身を演出するということに執着せず、贈答歌の加工も施さなかつたのであろう。一方で実定の『林下集』は、松野が「沈淪詠歎から還任祝賀でまとめる編纂意図」を指摘したように、自己をどう見せるかという意識が強く、かなり読者を意識した家集と言える。贈答歌においても、和歌一首の巧拙や、どう演出するかという点にまで拘泥し、加工したのであろう。

六 おわりに

本稿では主に『林下集』と『実家集』の贈答収載態度を考察してきた。『林下集』は、自己をどう演出し、後世にどう残すかということを意識し、相当の加工が施された家集と考えられる。その際、和歌表現の完成度を高め、修辭を凝らし、詞書と和歌を対応させ、時には大胆な配列の入れ替えも行ったようである。もとは鸚鵡返しのように繰り返されていた贈答の語句を、相手の歌であつても別表現に変えた例も確認できた。一方で『実家集』には、原歌が大幅に改作された形跡に乏しい。こうした差異は、両者の歌人としての性格、資質に起因している。このように、同一の贈答歌であつても家集によつて形が異なる例は少なくない。次に挙げる殷富門院大輔と藤原隆信の贈答もそれに当たる。

九月つごもりに、ひとく秋のわかれをしむうたども
よまれしついでに

(A) ゆく秋のわかれはいつもある物をけふはじめたる心ちの
する

かくてものがたりなどしくらして、かへられしに

(B) たづねくるかひこそなけれゆく秋のわかれにそへてかへる
けしきは

かへし 右京権大夫たかのぶ

(C) ゆく秋のわかれにそへてかへらずはなにゆゑきみがをしむ
べき身ぞ

又 なかつかさのせうさだなが

(X) かぎりあらむ秋こそあらめ我をだにまてしばしともいは
こそあらめ (大輔集 I・八〇〜八三)

九月つごもりの日、ある所に人くまかりあひて、歌
よみ連歌などして帰にしに、女房中より

(A) 年毎に秋のわかれは有ものをけふはじめたる心地こそすれ
あまたのなかなりしかども人く、かへしなくては

へしかば

(Y) としごとにかはらぬ秋のくれもなほあふ人からとけふこそ
はしれ

かくてかへりしを、なほよびとめて

(B) 尋ねくるかひこそなけれゆく秋の別にそへてかへるけしき
は

かへし

(C) ゆく秋のわかれにそへてかへらずはなにゆゑ君をしむべ
き身ぞ (隆信集Ⅱ・八〇六～八〇九)

両集を比べると、定長歌(X)と隆信歌(Y)の有無や、人名
隳化の程度差などもあるが、(A)と(A')の大輔歌に大きな異
同がある。紙幅の関係から詳細な分析は別機会に譲るが、仮に本
稿で確認した論理を当てはめると、次のようになるのではないだ
ろうか。まず(B)(C)と(B')(C')は異同もほぼなく、「ゆ
く秋の別れ」という共通の語もあり、同一の贈答と認められる。

一方、(A)もしくは(A')のどちらかが原歌であろう大輔の歌は、
それに対する返歌(Y)に「としごと」の語があることを考え
ると、元は『隆信集』の(A')の形であった可能性が高い。『隆
信集』では(A')と(Y)に「としごと」が、(B')と(C')
に「ゆく秋の別れ」がそれぞれ共通し、贈答歌として原態を示し
ていると考えられる。対して『大輔集』では、(A)(B)(C)
で「ゆく秋の別れ」という語句が共通しており、おそらく大輔自
身が家集編纂時に、この三首の統一を図って、(A')から(A)
へと加工したのではあるまいか。結果としては、両集の中で、そ
れぞれに統一が見られる。

こうした家集間における相違は、私家集の編纂という問題を考
える際には看過できまい。もちろん詠歌記録の保存のなされ方や
記憶違いなど、様々な要因を考慮すべきではある。だが、私家集
には公開性もあり、歌人たちは自らの家集を他者にどう読ませる
か、意識していたはずである。今後もしこうした事例を拾いながら、

私家集編纂という営為について考究して行きたい。

注(1) 日本文学 ミロ 図書館・辞典ライブラリー「藤原実定(中村文執
筆)」「藤原実家(関口祐未執筆)」。

(2) 日本文学 ミロ 図書館・辞典ライブラリー「林下集(中村文執筆)」。

(3) 日本文学 ミロ 図書館・辞典ライブラリー「実家集(関口祐未執
筆)」。

(4) 実定とその集に関しては、松野陽一「林下集について」(『立正学
園女子短大紀要』八 一九六四年十一月。鳥帚 千載集時代和歌
の研究」(風間書房 一九九五年)収録、江藤美紗子「藤原実定論
—妻の死を廻る哀傷歌を中心に—」(『藤女子大学国文学雑誌』九
一九七一年三月)、中村文「後徳大寺実定の沈淪」(『立教大学日本
文学』四六 一九八一年七月。『後白河院時代歌人伝の研究』(笠間
書院 二〇〇五年)収録、櫻井陽子「徳大寺家の人々をめぐって」
(『あなたが読む平家物語2 平家物語説話と語り』有精堂 一九九
四年)、黒田彰子「林下集贈答歌群をめぐって」(『愛知文教大学比
較文化研究』三 二〇〇一年十一月。『後成論のために』(和泉書院
二〇〇三年)収録)、等。実家とその集に関しては、中村文「藤原
実家について」(『立教大学日本文学』五九 一九八七年十二月。『後
白河院時代歌人伝の研究』(笠間書院 二〇〇五年)収録)、中村文
「伝記と物語のはざまに—平安末期歌人伝の自註と再解釈—」(『物
語という回路』新曜社 一九九二年)、森本元子「私家集余考」(『平
安文学論集』風間書房 一九九二年)、久保田淳「冷泉家時雨亭叢
書二五 中世私家集一」解題(朝日新聞社 一九九四年)等。

(5) 注(4) 松野論文。

(6) 注(4) 黒田論文。以下引用する黒田論文は全てこの論文に拠る。

(7) 前述の『続千載集』二一七三番歌は『林下集』の形で採っている
にもかかわらず、二〇〇六番歌は『林下集』ではなく『寂蓮集』の
形で採っている。この問題は『続千載集』編纂論に関わってくるた

め詳述は避けるが、この二つの贈答歌はそれぞれ答歌を詠んだ方の家集の形で採録されている点共通しており、その点が何らかの関わりがあるうか。

(8) 注(4)森本論文。

(9) 一例としては、「あふことのなげきの本をたつぬればひとりねよりぞおひはじめける(拾遺集・卷十五・恋五・九五二・藤原有時)」、「花桜まださかりにてちりにけんなげきのもとをおもひこそやれ(統詞花集・三八九・成尋法師)」、「ことのはをかきやるかたもげにぞなきなげきのもとたにのくちきも(五杜百首(俊成II)・一六八)等。

(10) 「遣懷哀傷十首」には実家歌が九首しかないが、実定歌との対応から見て、おそらく三九九の前に一首あったものが欠脱してしまっただと考えられる。なおこの「遣懷哀傷十首」のうちの一組は『新勅撰集』巻第十八(一二四一〜一二四二)に収載されている。

(11) この贈答のうち最初の実定詠は『統古今集』に採られているが、自身の家集『林下集』ではなく『実家集』にある(A)歌の形で収載されている。

だいしらず

後徳大寺左大臣

ものおもふやどのこずゑのみちこそなみだともにとまらざりけれ
(統古今集・巻第十六・哀傷歌・一四五四)

ただし『統古今集』に実定詠は六首あるが、そのうち六六三番と一四五四番は『林下集』にもあるもの、六六三番は『万代集』、一四五四番は『実家集』にもあり、『林下集』が撰集資料に存したか否か判断しかねる。また実家の歌は一首も採られておらず、『実家集』が撰集資料にあつたかも不明であり、この問題はここでは留保しておく。

(12) 注(4)松野論文。

(13) 注(4)江藤論文。

(14) 中村文「後徳大寺実定の沈論」(『立教大学日本文学』四六・一九八一年七月)、『後白河院時代歌人伝の研究』(笠間書院 二〇〇五年)

収録)。

(15) 脇谷英勝「旅人と俊成―抒情歌の特質及び亡妻哀傷挽歌を中心に―」(『帝塚山大学紀要』二五・一九八八年十二月。津田大樹「亡妻挽歌史論」(『日本文学』五四・二〇〇五年十二月)等。

(16) 浅見和彦「藤原隆信と妻の死」(『成蹊国文学』一三三・一九九〇年三月)、高柳祐子「中世和歌の哀傷表現 建久四年(一一九三) 美福門院加賀哀傷歌群に見る死と生」(『死生学研究』九・二〇〇八年三月)、拙稿「覚綱とその家集―「宮ばら」の意味するもの―」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第三分冊』五八・二〇一三年二月)等。

(17) 注(14)中村論文。

(18) 『林下集』において「白川」とは歌林苑を、「歌仙ども」とは歌林苑に集まる歌人たちを表す。この「うたあはせ」とは、仁安二年(一一六七)冬に催行された会であることが、萩谷朴(『歌合大成』三六六)により指摘されている。なお「白川のうたあはせに水鳥を」との詞書がある『林下集』一五九番も同会での詠である。それ以外にも二二〇番、二二二番にも歌林苑を表す「白川」という語が見える。

(19) 『林下集』六八番、『長秋詠藻』二二八・二三三・三三五二番、『林葉集』九五五番等。

(20) 松野陽一「後徳大寺実定家結題百首考」(『東北大学教養部紀要』三三・一九八一年二月)、「鳥帯 千載集時代和歌の研究」(『風間書房』一九九五年)収録)、『類題鈔』等。

(21) 中村文「藤原実家について」(『立教大学日本文学』五九・一九八七年十二月)、『後白河院時代歌人伝の研究』(笠間書院 二〇〇五年)収録)でも、実家は「総じて歌合や定数歌での詠を記録することに不熱心であった印象を与える。「実家は(場)を共にする人々と楽しみ合うような風雅のあり方に執する自らの姿勢を明確に認識」していたのではないかと述べられている。

(22) 注(21)参照。

(23) 『今鏡』、『平家公達草紙』、『和琴血脈』、『実家集』三七一番歌等。

(24) 『実家集』三六五、三七七、三七九、三八六番歌等。

(25) 『林下集』五四番の詞書「おなじだい、ださぬうた」、一七八、

一八一番の詞書「おなじだいを、いださぬ」等からは、和歌催事に

出詠しなかった歌まで家集に収載していることが分かり、これらも

拙撰集撰集を意識し、より多くの和歌を収めようとした痕跡か。

【付記】

本稿は、平成二十三年度和歌文学会一月例会（平成二十四年一月七日（土）於 日本大学文学学部）における口頭発表をもとに成稿した。席上および発表後に、ご教示を賜った先生方に御礼を申し上げます。

新刊紹介

村井利彦著

『源氏物語逍遙 村井利彦著述集』

本書は、平成二十五年九月に他界された村井利彦氏が生前に書き上げたさまざまな論考を一冊にまとめたものである。とりわけ源氏物語にまつわる氏の研究業績を多く

収録した本書では「巻々と人物」「物語の思想」「文学の周辺」という三つの区分を軸に、それぞれの論考が配列されている。

「巻々と人物」では桐壺から宇治十帖にいたる源氏物語の各巻を対象とし、その内容を探っていく。あくまで作品の本文を尊重しながらも決して視野狭窄に陥ることなく、節々に散りばめられた断片を拾い集めることで物語の背後に隠された文脈を描き出す

氏の手法は、時にスリリングでさえある。

また本書の末尾には、ご息女の結婚式を題材にされた随筆も収録されている。氏に曰く「費用対効果最悪の祭事」である結婚式をどうにか盛り上げようと苦心される氏の努力がユーモラスに語られ、お人柄の透けて見える思いがする。

（二〇一四年一月 武蔵野書院 A5判 三八九頁 本体五〇〇〇円）〔長尾 崇〕